

第1部

I 総論

1. 建学の精神

1) 建学の精神

創立者松前重義（1901～1991）は、青年時代に「人生いかに生きるべきか」について思い悩み、1925年内村鑑三（1861～1930）の研究会を訪ね、その思想に深く感銘を受けるようになった。特にデンマークの教育による国づくりの歴史に啓発され、生涯を教育に捧げようと決意して1936年東京武蔵野に「望星学塾」を開設した。

ここに学園の原点がある。

創立者松前はこの「望星学塾」に次の四つの言葉を掲げた。

- ・若き日に汝の思想を培え
- ・若き日に汝の体軀を養え
- ・若き日に汝の智能を磨け
- ・若き日に汝の希望を星につなげ

ここでは、身体を鍛え、知能を磨くとともに、人間、社会、自然、歴史、世界等に対する幅広い視野をもって、一人ひとりが人生の基盤となる思想を培い、人生の意義について共に考えつつ希望の星に向かって生きていこうと語りかけている。

本学園は、このような創立者の精神を受け継ぎ、明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材を育てることにより、「調和のとれた文明社会を建設する」という理想を高く掲げ、歩み続けていく。

2) 創立者松前重義と建学の精神（学校法人東海大学学園総覧2016より引用）

【生いたち】

松前重義は熊本県上益城郡大島村（現在の嘉島町）に生まれ、小学校5年生のとき熊本市に移り住んだ。生まれ育った農村と違い、市内では夕方になると一斉に電灯がともり、少年時代の松前はその美しさに驚き、「なぜつくのだろう」とその不思議さに素朴な疑問を抱いた。後に松前は、この少年時代の体験が「電気」の分野を学ぶきっかけになったと語っている。

そして県立熊本中学校（現・熊本高校）から熊本高等工業学校（現・熊本大学工学部）、東北帝国大学（現・東北大学）工学部へと進むが、松前の青春時代は、中学時代に兄の影響から始めた柔道などのスポーツに熱中する日々であった。その一方で、大学では電気工学を学び、卒業研究は電磁気学の権威である抜山平一教授のもとで、後のトランジスタやICへと発展する真空管の特性などについて研究した。

【日本の科学技術発展のために～技術者運動を展開】

大学を卒業した松前は、国の事業に携わりたいと希望して逓信省（現・総務省）に技官として入省した。しかし、役所の生活は無味乾燥で事なかれ主義が蔓延していた。当時の日本の社会は指導者として法学部出身者を最優先する風潮が根強く、一般的に文科系と理科系の人との間には理解のうえで深い溝があった。松前はこうした社会の現実を憂え、国家の正常な発展のためには文科系と理科系の相互理解が不可欠であるとの思いを強くする。同時に、世界や社会の動向に無関心になりがちな技術者の意識改革と地位の向上を訴える技術者運動を展開したのである。

また、松前は当時の日本の科学技術が外国の技術に多くを依存していることに対し、国産技術開発の重要性を説き、自らもその研究に努めた。

【情報化時代への曙～無装荷ケーブル通信方式の発明】

20世紀はじめの通信技術の課題は、より遠くへ、より速く、より大量に情報を送ることにあった。電話通信の分野では、アメリカ・コロンビア大学のピューピン教授が開発した装荷ケーブル方式が世界の主流

だった。これは、電流の減衰を防ぐため電話ケーブルの途中で装荷コイルを挿入するものだったが、この方式は音声不明瞭、一回線一通話しかできず不経済であるなど、さまざまな欠点があった。

そこで松前は、篠原登らと研究成果をもとに、既成概念にとらわれることなく装荷コイルを使わない新しい通信方式を開発した。これは、長距離ケーブルの途中で増幅器を設置して電流を増幅させ、高周波の電流に音声を乗せて送る搬送方式で、装荷ケーブル方式の欠点を一気に解決し、しかも一回線で複数の通話ができる多重通信を可能とするものであった。これが世界的にも有名な無装荷ケーブル通信方式である。

やがて国と民間企業が協力する国産プロジェクト研究によって実用化が進み、1939年日本と中国、約2,700キロの間が無装荷ケーブルで結ばれた。その後、この通信方式は世界の主流となり、今日の情報化時代を開くきっかけとなったのである。

【教育への志を立てる～内村鑑三との出会いとデンマーク体験】

逋信省時代に松前重義は、無味乾燥な役所での毎日を送るなかで「人生いかに生きるべきか」について思い悩み、内村鑑三（1861～1930）が主宰する聖書研究会や講演会などに通った。内村は無教会主義を唱えたキリスト教思想家で、その『デンマルク國の話』、『後世への最大遺物』などの著書は当時の青年たちに大きな影響を与えた。

そこにおいて松前は、内村の思想と人類の救済を説く情熱的な訴えに深く感銘した。また、そのなかで松前は、プロシアとの戦争に敗れ、疲弊した国を教育によって再興させた近代デンマークの歩みを知る。とくに、その精神的支柱となった N. F. S. グルントヴィ（1783～1872）が提唱する国民高等学校（フォルクホイスコーレ、国民大学とも訳す）の姿を知り、そこに教育の理想の姿を見出したのである。

「生きた言葉による学校」「民衆のための大学」といわれた国民高等学校の教育は、教師と学生が生活を共にし、自由に社会を論じ、哲学を語り合う活気に満ちた学校であった。1934年に松前は、その教育事情を視察するため、デンマークを訪問している。そこで得たものは、後に松前が述べているように、学校とは「歴史観、人生観、使命感を把握せしめ、以て個々の完成に努力することにある」べきだということであった。そして、この教育こそが豊かな酪農王国デンマークを築く原動力になっていることを目の当たりにしたのである。この体験を通して松前は「国づくりの基本は教育にあり、教育を基盤として平和国家日本を築こう」と決意したのである。

【東海大学の原点～望星学塾の開設】

松前はかねてから妻信子や松前の理想に共鳴する友人の篠原登、大久保真太郎など数人の同志とともに教育研究会という小さな集まりをもち、シュバイツァーやペスタロッチなどの人生・思想を研究していた。そして松前は、無装荷ケーブル通信方式の発明により、電気学会から「浅野博士奨学祝金」を受けると、これを基金の一部として念願の教育事業を開始するため、1936年に東京・武蔵野に望星学塾を開設したのである。ここでは、デンマークの国民高等学校の教育を範としながら、対話を重視し、ものの見方・考え方を養い、身体を鍛え、人生に情熱と生き甲斐を与える教育をめざすもので、聖書の研究を中心として日本や世界の将来を論じ合う、規模は小さくとも理想は大きく、活気ある学習の場であった。この塾が今日の学校法人東海大学の母体となったのである。

【平和への信念を貫く～二等兵として激戦地へ】

やがて第二次世界大戦が始まると、松前はわが国の生産力などの様々な科学的データをもとに戦争の早期終結を唱えたため、通信院工務局長（当時のわが国における通信部門の最高責任者）という国の要職にありながら、42歳で兵隊の位で一番低い二等兵として南方の激戦地に送られた。そのため望星学塾の活動も停止せざるを得なくなった。

しかし九死に一生を得て帰国すると、やがて技術院参議官となり、原爆投下の直後には広島の実地調査に入って、原爆の惨状を目の当たりにした。そして終戦後すぐ通信院総裁に就任し、廢墟となった日本の通信事業の復興に努める。一方、1943年に開設した航空科学専門学校を前身とし、文科系と理科系の相互理解と調和を基本に掲げて東海大学（1946年旧制東海大学、1950年新制東海大学となる）を開設したのである。

【世界の中の日本を思う～科学技術立国をめざして】

松前は、日本の科学技術政策の貧困を憂え、技術者の地位向上や国産技術の開発を訴え続けてきた。その成果の一つが戦前の無装荷ケーブル通信方式の発明であり、また、戦後の科学技術庁の設立である。

松前は、天然資源に恵まれない日本が世界に貢献していくには、独創的な技術開発による科学技術立国の道を歩むほかはない、と考えていた。しかもその科学技術は人類の幸福のためにあるべきものだ、との思いは広島原爆調査などの体験からますます強くなっていた。もはや科学技術は、扱い方を間違えれば人類を破滅に導くほどの力を持つに至っていたのである。

そして、国の行方も人類の将来も、これに携わる人間の思想に左右されることを身をもって体験した松前は、かねてからめざしていた「思想を培う教育、文科系と理科系の相互理解をめざした教育」を東海大学のなかで実践していくのである。

【新しい出発～公職追放など様々な苦難のなかで】

戦後の松前の歩む道は多難であった。当時日本を占領していた連合国軍総司令部（GHQ）の命令で、戦時中に国の要職にあったという理由で1946年には公職追放（重要な公職から除外する処置）になる。このため、発足したばかりの大学の運営に携わることもできなくなった。ここに至り東海大学は、戦後の価値観や社会的・経済的・思想的混乱のなかで松前という柱を失い、一時は廃校の危機に瀕するほどになった。しかし、松前の理想に共鳴する多くの人々によって大学は支えられ、再建への努力が続けられる。そして1950年追放から解除されるや、松前は直ちに学園に復帰すると、獅子奮迅の活躍で理想の学園づくりに邁進し、今日の総合学園を築き上げてきたのである。

【希望を星につなぐ】

松前が教育に託したものは、人類の幸福と平和の実現に向かって、明日の歴史づくりを担う人材の育成にあった。

そして松前はすべての若人に向かって語りかける。「若き日に汝の希望を星につなげ」と。この希望とは、高い理想や大志を表している。そしてこの言葉は、内村鑑三の心の師であるクラーク博士の有名な「少年よ大志を抱け」と同じ精神の表現であり、若人への時代を超えたメッセージである。

現代社会の変化は激しく、私たち人類の未来にも様々な難問が横たわっている。だからこそ松前が示した高い理想をもって未来をみつめていくことが、いま私たちに最も求められているのである。

2. 東海大学医療技術短期大学の教育理念

東海大学医療技術短期大学は、建学の精神に基づき、生命尊重の人間観、歴史観、世界観の確立による「人間愛」を根底とする看護観を育み、その信念と行動によって人類の平和に貢献できる人材を育成する。

1) 教育方針

本学は、1974年開学時に示された創立者松前重義の「温かい看護のできる人間性豊かな看護師を育てる」を教育方針としている。

2) 教育目的

教育基本法及び学校教育法に則り、人道に根ざした深い教養をもつ社会人並びに医学医療の進歩に適応する高い専門知識と技術を持ち、生命尊重の人間観、人生観、社会観とその使命感を有する視野の広い医療技術者を育成することを目的とする。

3) 教育目標

1. 人間愛を深め、生命の尊厳と人間性の尊重を基調とし、調和の取れた社会人としての成長をめざす。
2. 看護に関する理論および技術を学び、看護実践の基礎能力を身につける。
3. 主体的に学修を継続し、問題意識を持って探求する姿勢を身につける。
4. 保健医療福祉における看護の機能と社会的役割を認識する。
5. 保健医療福祉の中で生じる問題を理解し、倫理的に対処する能力を身につける。
6. 関連諸科学を統合して人間理解を深め、看護観の確立をめざす。

4) 3つのポリシー

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与に関する基本的な方針）

本学では、以下の能力を身につけ、且つ、所定の単位を修得し卒業した学生に短期大学士（看護学）の学位を授与する。

（卒業時期待される結果）

1. 人間を常に成長し続ける存在として捉え、生命尊重とその人個人としての人間性を尊重し看護実践ができる。
2. 様々な発達段階および健康の段階にある個人・集団に対して、その個人の健康状態の評価を行い、適切な生活過程を整え、自立を促すための看護が提供できる。
3. 保健医療福祉チームの一員として、看護職の独自の機能と役割を担うことへの自覚と責任を持ち、専門職としての意思決定に参加することができる。
4. 社会のニーズに対応した看護を提供するために、常に専門職として主体的に学び続ける意思を表明することができる。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施に関する基本的な方針）

本学では、その教育理念に基づき、教育基本法及び学校教育法に則り、人道に根ざした深い教養を持つ社会人ならびに医学医療の進歩に適応する高い専門知識と技術を持ち、視野の広い医療技術者（看護師）を育成するために以下のようにカリキュラムを編成する。

1. 学園の建学の精神を具体的に学ぶ本学教育の中核となる科目として現代文明論を位置づけ、看護学を学ぶ学生が専門意識にとらわれず自らの専門を生かす基盤としてゆく。
2. 広く多様な基礎的知識と学習能力を獲得するために、基礎教育科目として、「総合教育科目」「情報科学」「外国語科目」「体育科目」を設置する。
3. 専門的な知識・技術を体系的に学ぶために、専門基礎分野から専門分野、そして統合分野へと段

階的に学習できるよう科目を設置する。

4. 問題意識をもち、主体的に学習を継続できるように参加型の授業方法を多く活用する。
5. 演習・実習は少人数制とし、看護実践能力のより充実した獲得を図る。
6. 個々の学生を尊重した教育を展開する。

アドミッション・ポリシー（学生募集の方針）

学園の建学の精神を理解し、本学の教育理念に共鳴し、人を愛し、温かい看護をめざす人を求めます。

3. 沿革

1974 年 4 月 1 日 第一看護学科（40KF 生）50 名、第二看護学科（40KS 生）50 名定員で、湘南校舎に開学し、同時に医学部が伊勢原校舎に開学した。

第一看護学科は高等学校卒業生または卒業見込みの者に受験資格がある 3 年制のコース、第二看護学科は高等学校卒業生または卒業見込みの者で准看護師の免許所有者または取得見込みの者に受験資格がある 2 年制のコースであった。

初代学長である松前重義は医療技術短期大学について、「東海大学はかねてよりの念願であった医学部が発足し、東洋一の付属病院も開院した。しかし、如何に優秀な医師を集め、最新の医療機器を整備しようとも、それをアシストする看護婦の献身的な看護なくしては、病院は心をもたない冷たい科学の殿堂にすぎなくなる。私はかねてより医療の実践における看護婦の存在を強く認識しておったので、医学部および付属病院の発足と時を同じく、看護婦の養成機関である医療技術短期大学を開学した」（『東海大学建学の記』 p. 89, 1973.）と本学の建学の理念を記述している。

松前重義は『学生便覧（1973）』の巻頭言「人道的で愛情に満ち、使命観に徹した看護職員を」のなかで「東海大学の指向する建学の理念は、物質文明と精神文明の調和による総合文明建設のための人材を養成することにあります。本学はこの理念に基づき、生命尊重の人生観・歴史観・世界観を確立させるとともに、自己の使命を自覚し、広い視野と高度の専門知識をもった医療技術者の養成をめざしています。しかも本学に学ぶ学生は、人道的で愛情に満ち、看護という職責に使命観を持ちうる人でなければいけません」として「人間愛を深め、生命の尊重を基調とするばかりでなく、身体的、精神的、社会的にも健康を保持し、増進に寄与しうる専門職としての看護婦養成に全力を傾け、日本における看護の画期的存在たらんとしている」と本学の建学の理念を記述している。

本学は開学 1 年前から内田靖子初代学部長を中心に、看護教員スタッフによる本学設立に向けて様々な事柄を検討すると同時に東海大学建学の精神を深く理解するためにデンマーク研修を実施した。第 1 回は 1973（昭和 48）年 11 月 2 日に内田靖子学部長を団長として、第 2 回は 1974 年 1 月 11 日に井上幸子教授を団長として実施した。この成果は 1975 年 8 月の第 1 回ヨーロッパ研修としてデンマークで学生が研修する道へとつながり、その後デンマーク看護研修となった。2000 年には、デンマークオーフス地域看護学校との学術交流協定を締結し、デンマークからの研修団の受入れも開始、相互交流を行っている。

デンマーク看護研修は、2014 年度で第 40 回を迎える伝統ある研修となり、本学教育の中心的な柱となっている。（表 2「デンマークとの交流およびデンマーク看護研修の沿革」参照）

表1 東海大学医療技術短期大学沿革

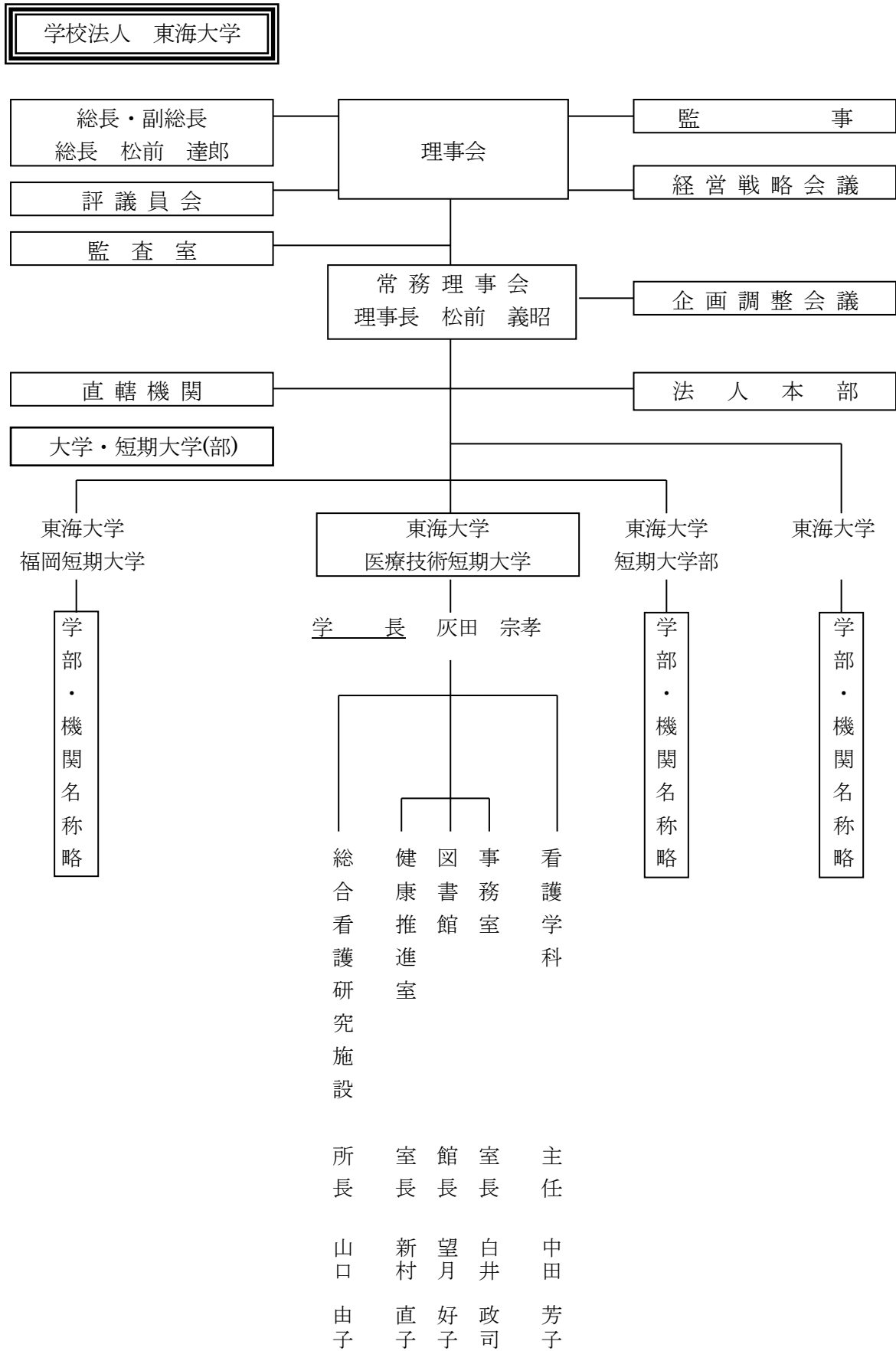
1974年4月	東海大学医療技術短期大学 第一看護学科・第二看護学科開学 第一看護学科・第二看護学科定員各50名
1976年4月	定員変更 第一看護学科・第二看護学科各80名
1983年4月	定員変更 第一看護学科100名、第二看護学科50名
1984年4月	教育課程変更 卒業要件単位 第一看護学科105単位以上、第二看護学科70単位以上
1990年4月	教育課程変更 卒業要件単位 第一看護学科98単位以上、第二看護学科75単位以上
1991年4月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設開設
1996年4月	定員変更 第一看護学科70名
1997年4月	教育課程変更 卒業要件単位 第一看護学科116単位以上、第二看護学科87単位以上
2000年4月	教育課程変更 卒業要件単位 第二看護学科75単位以上
2000年12月	デンマークオーフス地域看護学校との学術交流協定締結
2001年1月	中国牡丹江華日高級中学との留学生受入及び交流に関する協定締結
2001年4月	教育課程変更 卒業要件単位 第一看護学科108単位以上
2001年10月	他の看護系短期大学との相互評価を実施
2004年4月	第一看護学科 看護学科と名称変更及び定員変更80名 第二看護学科 募集停止
2005年3月	第二看護学科 廃止
2005年4月	教育課程変更 卒業要件単位 看護学科105単位以上
2006年9月	財団法人短期大学基準協会（第三者評価認証機関）による第三者評価受審 結果：適格認定
2009年4月	教育課程変更 卒業要件単位 看護学科109単位以上
2013年9月	一般財団法人短期大学基準協会（第三者評価認証機関）による第三者評価受審 結果：適格認定

表2 デンマークとの交流およびデンマーク看護研修の沿革

デンマークからの訪問および研修団の来日		デンマーク看護研修	
1973年11月		大学設立前の準備として教員が研修団としてデンマーク訪問 第1回目	
1974年1月		大学設立前の準備として教員が研修団としてデンマーク訪問 第2回目	
1974年4月	本学開学		
1974年10月	デンマークからグステ・ユル夫妻(元デンマーク看護協会オーフス支部長)来学		
1975年8月		第1回デンマーク看護研修実施(本学のみ) 参加学生13名 教員1名	
1977年8月		第3回デンマーク看護研修 この回より、東海大学短期大学(4校舎)合同欧州研修旅行の行程内にて実施	
1994年10月	創立20周年記念式典にて招聘講演 メーテ・トルセン(デンマーク看護協会会長) グレート・ギリング(オーフス看護学校)	第4回から第24回まで、東海大学短期大学(4校舎)合同欧州研修旅行の行程内にて実施	
1999年3月	デンマークより教員他7名、学生9名の研修受入れ		
1999年8月		第25回デンマーク看護研修実施 この回より本学だけの研修となる	
2000年12月	デンマークオーフス地域看護学校との 学術交流協定締結	第26回～第42回まで、本学だけのデンマーク看護研修実施 (13～15日間の日程)	
2005年10月	創立30周年記念式典にて招聘講演 インガマルガレーテ・イエンセン(オーフス看護学校) グレート・ギリング(オーフス看護学校)		
2006年4月	デンマークより教員他10名、学生10名の研修受入れ		
2010年4月	デンマークより教員他4名、学生26名の研修受入れ		
2013年3月	デンマークより教員他2名、学生14名の研修受入れ		
2015年3月	デンマークより教員他3名、学生19名の研修受入れ		
2016年8月			第42回 デンマーク看護研修実施
2017年3月	デンマークより教員他3名、学生19名の研修受入れ		

4. 組織

1) 学園内組織

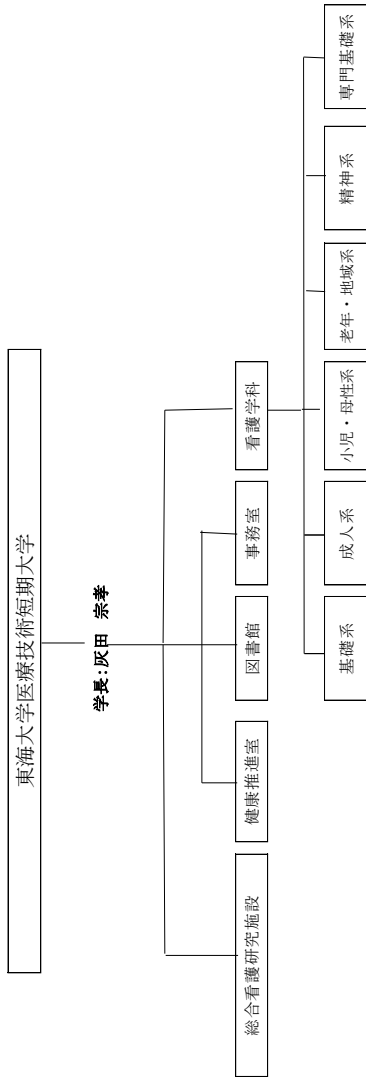


1) 学内組織

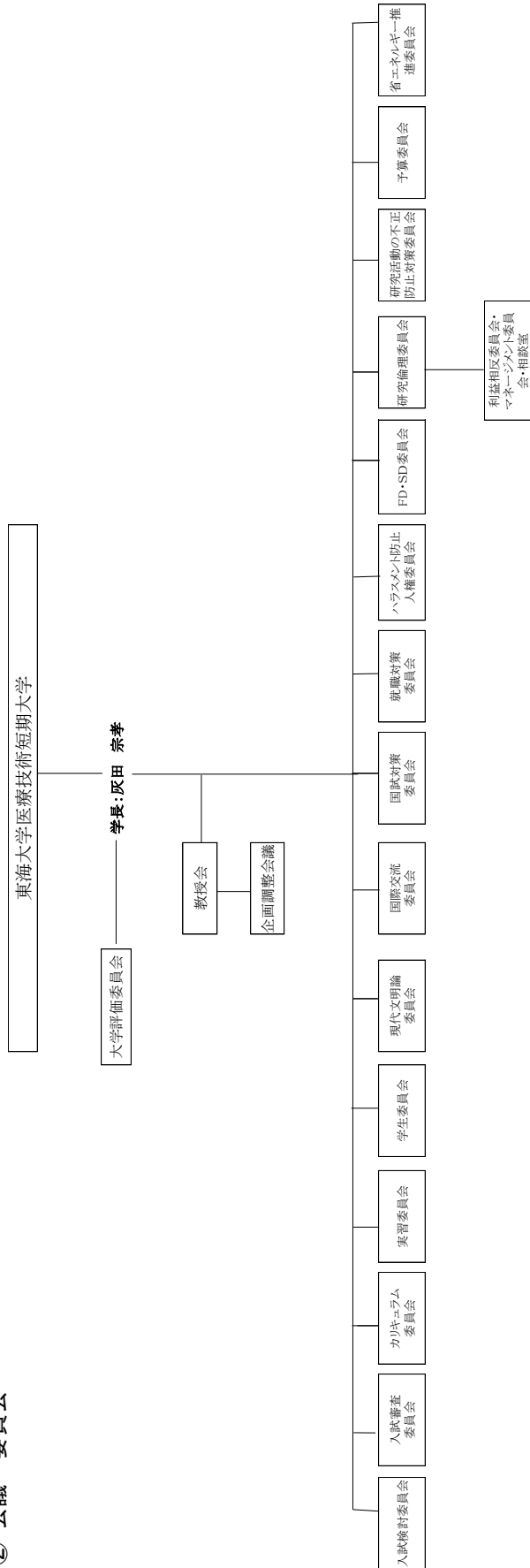
(1) 2016年度東海大学医療技術短期大学組織・委員会構成図

2016年度 東海大学医療技術短期大学委員会組織

① 組織図



② 会議・委員会



(2) 2016 年度東海大学医療技術短期大学組織員構成 (2016. 5. 1 現在)

<看護学科>

		教授	准教授	講師	助教	助手
看護系	基礎 基礎	※山口 由子 (15KF I)	久保 典子 (14KF II) 蔵本 文乃	千葉 美果 (15KF I) 岩屋 裕美 (14KF II) 端山 淳子		
	成人 成人		※丹澤 洋子 (16KF II) 阿部ケエ子 (15KF II)	萱嶋 美子 (14KF I) 坂本 優子 高本 征子		
	小児 小児		淵田 明子	木村 節子 (16KF I)		
	小児 ・ 母性	<学科副主任> ※望月 好子 小川 景子 (16KF I)				
	地域 ・ 老年	<学科主任> ※中田 芳子 鈴木 陽子	新村 直子 (14KF I) 飯室 淳子	春田 典子 (16KF II)		
	精神 精神			※大貫 美奈子 (15KF II) 前澤 尚子	樋口 貴子	
専門 基礎系	専門基礎	<学長> 灰田 宗孝 ※泉 義雄		二葉 千鶴		

— 2016 年度新任教員、※領域長、()指導教員クラス名

<事務室>

構 成 員	
事務室長	白井 政司 (副参事)
係長	井上 茂夫 (副主事)、寺村 絵美 (副主事)
事務室員	柳川 裕恵 (主査)、芹沢 利尚 (主査)、福田 淳 (主査)、中村 李菜 (職員一級)、非常勤職員 3 名

<図書館>

構 成 員	
館長	望月 好子 (教授)
館員	佐藤 智佳子 (主事)、大島 美知子 (主査)、非常勤職員 3名
運営委員	大貫 美奈子 (講師)、萱嶋 美子 (講師)

<健康推進室>

構 成 員	
室 長	新村 直子 (准教授)
室 員	二葉 千鶴 (講師) 端山 淳子 (講師)

<総合看護研究施設>

構 成 員	
所 長	山口 由子 (教授)
所 員	阿部 ケエ子 (准教授)、飯室 淳子 (准教授)、久保 典子 (准教授)、木村 節子 (講師)、坂本 優子 (講師)、春田 典子 (講師)、井上 茂夫 (事務室係長・副主事)、福田 淳 (主査)

(3) 2016年度東海大学医療技術短期大学委員会委員構成 (2016.5.1現在)

<学内委員会>

委員会名	委 員 (◎：委員長、○副委員長)
大学評価委員会	◎望月 好子 (ALO・学科副主任・教授)、中田 芳子 (学科主任・教授)、鈴木 陽子 (教授)、丹澤 洋子 (准教授)、白井 政司 (事務室長・副参事)、寺村 絵美 (ALO補佐・事務室係長・副主事)、井上 茂夫 (事務室係長・副主事)、一野谷 陽一 (外部委員)
教授会	全教員、横田 弘子 (付属病院看護部長)、白井 政司 (事務室長・副参事)、芹沢 利尚 (主査)
企画調整会議	◎灰田 宗孝 (学長・教授)、中田 芳子 (学科主任・教授)、望月 好子 (図書館長・副学科主任・教授)、山口 由子 (総合看護研究施設所長・教授)、白井 政司 (事務室長・副参事)、井上 茂夫 (事務室係長・副主事)、寺村 絵美 (事務室係長・副主事)
入試検討委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)、望月 好子 (学科副主任・教授)、鈴木 陽子 (教授)、山口 由子 (教授)、白井 政司 (事務室長・副参事)、寺村 絵美 (事務室係長・副主事)、一野谷 陽一 (外部委員)
入試審査委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)、講師以上の全教員
カリキュラム委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)、望月 好子 (学科副主任・教授)、泉 義雄 (教授)、鈴木 陽子 (教授)、山口 由子 (教授)、丹澤 洋子 (准教授)、湊田 明子 (准教授)、大貫 美奈子 (講師)、白井 政司 (事務室長・副参事)、寺村 絵美 (事務室係長・)

	副主事)、中村 李菜 (職員一級)
実習委員会	◎阿部 ケエ子 (准教授)、飯室 淳子 (准教授)、久保 典子 (准教授)、木村 節子 (講師)、前澤 尚子 (講師)、千葉 美果 (講師)、白井 政司 (事務室長・副参事)、中村 李菜 (職員一級)
学生委員会	◎蔵本 文乃 (准教授)、岩屋 裕美 (講師)、千葉 美果 (講師)、高本 征子 (講師)、前澤 尚子 (講師)、芹沢 利尚 (主査)、福田 淳 (主査)
現代文明論委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)、鈴木 陽子 (教授)、丹澤 洋子 (准教授)、萱嶋 美子 (講師)、坂本 優子 (講師)、春田 典子 (講師)、端山 淳子 (講師)、二葉 千鶴 (講師)、樋口 貴子 (助教)、中村 李菜 (職員一級)
国際交流委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)、蔵本 文乃 (准教授)、新村 直子 (准教授)、淵田 明子 (准教授)、芹沢 利尚 (主査)、中村 李菜 (職員一級)
	<u>デンマーク看護研修</u> ◎淵田 明子 (団長・准教授)、○蔵本 文乃 (副団長・准教授)、中村 李菜 (職員一級)
	<u>スタディツアーフロムデンマーク</u> ◎淵田 明子 (准教授)
国試対策委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)、○新村 直子 (准教授)、小川 景子 (教授)、山口 由子 (教授)、阿部 ケエ子 (准教授)、久保 典子 (准教授)、丹澤 洋子 (准教授)、淵田 明子 (准教授)、岩屋 裕美 (講師)、大貫 美奈子 (講師)、萱嶋 美子 (講師)、木村 節子 (講師)、千葉 美果 (講師)、春田 典子 (講師)、芹沢 利尚 (主査)、福田 淳 (主査)
就職対策委員会	◎白井 政司 (事務室長)、中田 芳子 (学科主任・教授)、久保 典子 (准教授)、萱嶋 美子 (講師)、福田 淳 (主査)
ハラスメント防止人権委員会	委員：非公開 相談委員：◎飯室 淳子 (准教授)、樋口 貴子 (助教)、白井 政司 (事務室長・副参事)、佐藤 智佳子 (主事)
FD・SD 委員会	◎小川 景子 (教授)、岩屋 裕美 (講師)、千葉 美果 (講師)、高本 征子 (講師)、白井 政司 (事務室長・副参事)、井上 茂夫 (事務室係長・副主事)、寺村 絵美 (事務室係長・副主事)
研究倫理委員会	◎中田 芳子 (学科主任・教授)・小川 景子 (教授)、鈴木 陽子 (教授)、山口 由子 (教授)、寺村 絵美 (事務室係長・副主事)、坂部 貢 (外部委員)
	<u>利益相反委員会・マネジメント委員会・相談室</u> 白井 政司 (事務室長・副参事)、山口 由子 (総合看護研究施設所長・教授)、中田 芳子 (学科主任・教授)
研究活動の不正防止対策委員会	◎灰田 宗孝 (学長・教授)、中田 芳子 (学科主任・教授)、山口 由子 (総合看護研究施設所長・教授)、新村 直子 (健康推進室室長・准教授)、望月 好子 (図書館長・教授)、白井 政司 (事務室長・副参事)
予算委員会	◎白井 政司 (事務室長・副参事)、中田 芳子 (学科主任・教授)、望月 好子 (図書館長・教授)、井上 茂夫 (事務室係長・副主事)
省エネルギー推進委員会	◎灰田 宗孝 (学長・教授)、中田 芳子 (学科主任・教授)、山口 由子 (総合看護研究施設所長・教授)、新村 直子 (健康推進室室長・准教授)、望月 好子 (図書館長・教授)、白井 政司 (事務室長・副参事)

<学外委員会>

委員会名	委員
東海大学短期大学紀要委員会	審査委員：非公開 編集委員：望月 好子（学科副主任・教授）
学校法人東海大学建学75周年記念誌委員	丹澤 洋子（准教授）
短期大学基準協会評価委員	望月 好子（学科副主任・教授）
神奈川県看護師等養成所連絡協議会	理事：中田 芳子（学科主任・教授）、委員：鈴木 陽子（教授）
東海大学看護研究会	
学術集会運営委員	2016年4月～8月：阿部 ケエ子（准教授）、飯室 淳子（准教授） 2016年9月～：中田 芳子（学科主任・教授）、望月 好子（学科副主任・教授）、阿部 ケエ子（准教授）、久保 典子（准教授）、樋口 貴子（助教）
研究委員会委員	小川 景子（教授）、坂本 優子（講師）、蔵本 文乃（准教授・2016年7月～）
教育委員会委員	淵田 明子（准教授）、端山 淳子（講師）
キャリアパスワーキンググループ委員	丹澤 洋子（准教授）